

福音宣教の豊かさをディアコニアの視点から再発見する

ステファン・ファン・デア・ヴァット

1. はじめに

この度は特に、今日の福音宣教及び教会形成において、ディアコニアの果たす建設的な役割についての洞察を得たいと思います。ディアコニアという言葉が、二つの異なる事柄を表現していることに注意する必要があります。まず一つ目に、それは教会の社会的働きを表しています。要するに、ディアコニアとは隣人愛の実践、とりわけ困窮する隣人に対して、信徒個人としてまたは教会共同体としての「愛の奉仕」を意味します。愛を持って仕える業（ディアコニア）は、福音に生きる教会の本質をなす事柄です¹。これは教会史と実践神学の観点から検証することのできる事柄ですが、社会科学の観点からも検証することができます。

二つ目に、より狭い教会の中での執事的働きを表わしています。また、ディアコニアという単語は新約聖書で頻繁に使われているギリシャ語で、正しく解釈するためには十分な聖書の知識が必要だということです²。興味深いことに、

¹ 日本キリスト改革派教会憲法委員会第一分科会『日本キリスト改革派教会宣言集：附解題』（一麦出版社、2016年）、175～178頁参照。

² フィンランドのルーテル派の聖書学者でありディアコニアの専門家、Kari Latvusの言葉を引用したいと思います。彼は、ディアコニアに関する今日の世界規模のエキュメニカルな三つの大きな傾向を指摘しました。すなわち、「1）ケア/ディアコニアの重要性についてのさらなる気づき、2）執事の永続な慈善的働きを支持することへの関心、3）ディアコニアに関する語彙の起源と意味に関する学術的討論」です。K. Latvus, *Diaconia as Care for the Poor? Critical Perspectives on the*

英語でディアコニアとディアコナイトという単語は、異なる意味を持つ、関連した事柄を指しています。Diakonia（ディアコニア）は、教会の社会的働きに関わるより広い範囲の意味を持っています。しかし、diaconate（執事活動）は、教会の執事の働きを指しています。

私が焦点を当てるのは、日本、具体的には日本キリスト改革派教会（RCJ）の執事的活動に関係することです。しかし私は所属する南アフリカオランダ改革派教会（DRC）の考えに基づいて南アフリカ共和国の者としてこれを行います。ですから、両方の背景から神学的に論じたいと思います。そして、これら二つの根本的に異なる背景から、互いに多くのことを学べると思います。

主イエス・キリストの執事的宣教とは、伝道と社会責任を果たすことであり、それを教会堂の内でも外でも実践することであると単純に考えます。しかし、そう考えていてもなかなか実践できない私たちを含めた日本の諸教会に主が与えられた機会こそ、1995年の阪神淡路、2011年の東日本、2016年の九州熊本、2018年の西日本また様々な所であった自然災害ではないでしょうか。これらのことを通して教会は「教会堂」という閉ざされているいわば「聖なる領域」を出て、救われるべき人々が生きるこの世でキリストの愛を実践すること、すなわち主イエスの福音宣教を実践せざるを得なくなったとも言えるでしょう。要は「神を愛し、隣人を愛する」という黄金律、それに加えて、ヨハネ福音書13章34節にあるように主イエスがしたように隣人を愛することを熱心に行っていくものでありたいと思わされます。

様々な自然災害の悲惨な後遺症は、コミュニティが再建される中いまだに残っています。多くの点で物理的な復興作業は良好な進歩を遂げましたが、根

Development of Caritative Diaconia (Kuopio: Kirkon tutkimuskeskus, 2017), 11, https://evl.fi/documents/1327140/45386794/Diaconia+as+Care+for+the+Poor_53.pdf/54e8b4e5-4025-7e0c-44a8-ad4dd8faf4e0 この論文では、一つ目のトレンド、すなわち、ディアコニアの重要性についての新しい認識について、それが特に日本と南アフリカにおける教会形成にもたらす影響について焦点を当てたいと思います。

底にある霊的および精神的健康の課題に引き続き注意を払うことは重要です。例えば、心的外傷後ストレス障害、家庭内暴力、ネット・アルコール・薬物等の依存症、自殺、精神疾患など多岐に渡ります。

これらの問題を抱えている被災地の人々を支援するために、多くの執事的アウトリーチ（つまりディアコニア）がありました。その宣教的なディアコニアの業はどのような意義を持っていたのか、そしてそれによって様々な抑圧と苦しみを経験した人々に寄り添うことができるようになったのかということについて、この論文の後半で触れます。しかし、ディアコニアの現状、つまりその神学的な課題と実践について探求する前に、まずその発展の歴史的概観において重要な次元を明らかにしたいと思います。

2. 歴史的発展の概要

ディアコニアの歴史的発展について、初代教会から現代まで初期の時代、制度化の時代、宗教改革の時代の三つの時代を取り上げることができます³。初期の時代は、病人や貧しい人々を積極的に世話していた初期の教会（四世紀まで）が、ディアコニアの原型と見なされました。教会は社会の片隅に追いやられた存在でしたが、初代教会のクリスチャンたちは愛と交わりのコミュニティ（コイノニア）で互いに日々の世話と思いやりを具体的に表しました。この礼拝における相互のつながりは、貧しい人々に対する慈悲深い配慮（ディアコニア）にもつながったのです。

4世紀の初めに教会の状況はかなり変化しました。コンスタンティヌスの時代に、教会と国家の関係が緊密になっていくことによって、教会による執事的活動は徐々に少なくなっていきました。執事職（助祭）は、教会の階級制度と

³ ステファン・ファン・デア・ヴァット「ディアコニアに関する神学と実践」『改革派神学』第45号（神戸改革派神学校、2019年）参照。そちらで私はディアコニアの歴史的発展について、初代教会から現代までをいくつかの研究をもとに紹介しています。また、ディアコニアという言葉についての最近の研究も提供しています。改革派の観点から取り組みましたが、広くエキュメニカルな展開があったことも明らかにしました。

制度化されたディアコニアに取り込まれてしまいました。その後しばらく経って宗教改革の時代、教会の指導者たちは初期の教会の伝統的なディアコニアの形を回復しようと積極的に試みました。教会内での執事的働きや執事職を回復するための様々な試みがなされました。ジュネーブでのカルヴァンの功績は、これらの取り組みに大きく貢献しました。しかし、これらの努力にもかかわらず、宗教改革期の教会は執事職に関する組織の不確実性を明確にすることはできませんでした。また、執事的活動についての教会と国家との関係も解決されていませんでした。

19世紀以降のディアコニアの歴史的発展に関して、ルター派の伝統で育ったドイツの先駆者たちの影響を強く受けた、いわゆる自由な執事活動の時代が重要でした。富裕層と貧困層の間の社会的格差は（特にヨーロッパで）急速に広がりました。続いて、これに呼応して執事的働きの役割と意義が急速に変化しました。ディアコニアという言葉はまだ普及していませんでした。しかし19世紀最初の数十年間で、いわゆるプロテスタントの社会慈善運動が誕生しました⁴。19世紀後半になって、ディアコニアという言葉が登場し、定着した概念になりました。しかし、20世紀の大戦後の急激な社会政治的・経済的変化が、その定義や方法に大きな影響を及ぼしました。

1960年代、ディアコニア拡大の二度目の全盛期を迎えました。世界規模のエキュメニカル運動は、地理や宗教の境界を越えたところで、教会の責任と奉仕として、ディアコニアを重視しました。また、ディアコニアは教会の団結を促進するコミットメントと見なされました。世界教会協議会（WCC）やルター派世界連盟（LWF）は、世界規模の奉仕のための部門を設立しました。1970年代には、この発展によって問題が生じました。開発プロジェクトがしばしば完全に世俗化された形でなされていたためです。教会を基盤としたディアコニ

⁴「慈善（caritative）」という用語は、愛、慈悲深さ、恵み、積極的な思いやりを意味するラテン語のカリタス「*caritas*」（ギリシャ語の類義語は *agapē*）に由来しています。この言葉はカトリックの社会的伝統に用いられており、「クリスチャンの社会福祉事業」と言うこともできます。

アの宣教的特徴が再確認される必要がありました。宣教は三位一体の神の働きであり、教会が始めた活動ではないからです。1980年代もまた、ディアコニアのエキュメニカルな理解のターニングポイントとなっています。その教會的、總体的、預言者的な側面が強調されました。

間違いなくディアコニアとは、教会のまさに中心的な働きです。ディアコニアは、全ての神の民を召集して、苦難の中にある人類に神の存在を明らかに示すために、教会の執事的な手足である者が担うべき義務と召しなのです。それは教会の執事的な感性であり、すべての主の民の中心的なしるしであるとイエスが示された働きに、教会を導くはずのものです。そのしるしとは、この世界で苦しむ者たちに対する愛の奉仕に他なりません（マタイによる福音書 25:31-46）⁵。

3. ディアコニアの現状：神学的な課題と実践

3.1 ディアコニアの実践を導く中心的教義

これからディアコニアの歴史的発展から、ディアコニアに関する神学的な課題と実践に焦点を移します。まず、ディアコニアがどういう枠組み（体制）の中で実践されるべきかについて理解しましょう。これについて、WCCの1982年の「ディアコニアの現代理解」に関する議論で、ディアコニアを定義する八つのキーワードがあげられました⁶。

- 教会の歩みと健全性にとって不可欠なもの
- 地元(地域)への集中。すぐに助けが必要な「人々がいるところから始める」
- 国際的に連帯して世界的規模であること
- 予防。人々と共に根本的な原因に取り組み、不公正なシステムを続けさせないために

⁵ M. Avila, *Diakonia Remixed: A Biblical Perspective on Diakonia* (2013) 参照。
<https://network.crcna.org/sites/default/files/documents/Diakonia%20Remixed%20Biblical%20Perspective.pdf>

⁶ World Council of Churches, *Together towards Life: Mission and Evangelism in Changing Landscapes* (2013) 参照。
https://www.oikoumene.org/en/resources/publications/TogethertowardsLife_SAMPLE.pdf

- 構造的・政治的次元で関わる（総体的に）
- 信仰の家族（すなわち教会のコミュニティ）を超えた人道主義
- 相互的
- 自由をもたらす。人々の参加を促し、その文化と価値観を尊重し、その人たちが元気になることに重点を置く⁷

これらのキーワードは、今日の日本の教会での執事活動について考える際に考慮すべきいくつかのテーマを示しています。そして、日本キリスト改革派教会（RCJ）を含む各地の教会に、自分たちの関わりを評価するための枠組みを提供しています。別のレベルでは、キリストにあるパートナー、南アフリカオランダ改革派教会（DRC）から、ディアコニアの実践（具体化）についての貴重な洞察が得られます。

現在南アフリカのディアコニアの実践を導いているいくつかの教理—ディアコニアの専門家である DRC の Van der Merwe による—を挙げてみましょう⁸：

- 執事活動のアイデンティティは、三位一体の神に結びついている
- 執事活動は、教会の宣教と同じく、神の存在そのものから生まれ、態度や姿勢、行いに現われる
- 執事活動の焦点は、神の国をこの世にもたらすことである
- 執事活動は根本的に人との関わりを意味し、世界と連帯して立つ—コイノニア（交わり）や正義のないディアコニアはディアコニアとは言えない
- 執事活動は、この世界で、預言者・祭司・王の三職で説明されているイエス・キリストの生き方と働きを常に手本としている
- 執事活動の目標は、社会の変革である

⁷ Martin Robra, “Theological and Biblical Reflection on Diakonia: A Survey of Discussion within the World Council of Churches,” *The Ecumenical Review* 46, no.3 (1994): 282 参照。

⁸ Willie C. Van der Merwe, “Met woord én daad in diens van God: Die diakonaat van die NG Kerk in postapartheid Suid-Afrika” (DTh diss., Stellenbosch University, 2014), 52. <http://scholar.sun.ac.za/handle/10019.1/95820>

3.2 ディアコニアの定義に影響を与える現在の神学的議論

上記の枠組み（南アフリカの執事活動の中心的教義の枠組み）は、周りとの関わりなしには生まれませんでした。それは、20 世紀後半に二つの主要な神学的な議論が、特に西洋で勢いを増したために生じたのです。「三位一体の神」と「神の宣教（ミシオ・デイ）」です。これらのテーマはどちらも、今日の世界中のキリスト教会のディアコニアについての理解の大部分に影響を与えました⁹。

⁹ ディアコニアについての三位一体論的詳説は Kjell Nordstokke, “Trinitarian Perspectives on Diakonia,” in *Evangelism and Diakonia in Context*, ed. Rose Dowsett, Isabel Phiri, Dawit Olika Terfassa, Hwa Yung and Knud Jørgensen (Oxford, UK: Regnum Books International, 2015), 141-152, http://www.ocms.ac.uk/regnum/downloads/Evangelism_and_Diakonia_in_Context-wm.pdf を参照。

また、宣教の働きとしてのディアコニア及び福音化についての神学的見解については David S. Lim, “Diakonia and Evangelism as Functions of Mission: Theological Perspectives,” in *ibid.*, 31-45, http://www.ocms.ac.uk/regnum/downloads/Evangelism_and_Diakonia_in_Context-wm.pdf も参照。

Nordstokke (141-142) が、「福音派の間ではディアコニアの概念は普及していない。それはおそらく神学的伝統を支配していたアングロサクソンの流れに因るのだろう。福音派では、ディアコニアとは言わず、「社会的ミッション」や「社会的行動」と言うことが慣例となっている。しかし、福音派の者たちもまた、ミッションが総体的で統合的なものという理解をますます増していることにも留意すべきである。このことは『ケープタウン声明（コミットメント）』にも明確に示されているが、「ディアコニア」「執事的（diaconal）」という言葉はこの文書では用いられていない」と言っているのは興味深いことです。Knud Jørgensen, “Evangelism and Diakonia in Context: Obeying the Great Commission and the Great Commandment Now and Tomorrow,” in *ibid.*, 369 はこの現象を次のように述べて嘆いています：「ローザンヌ運動が、『包括的宣教（integral mission）』という言い方に加えて、ディアコニアという言葉を用いたらよいのにと願う。ディアコニアという言葉を用いることは、エキュメニカル運動との対話を強化するのに役立つだろう。ディアコニアは、『総体的（holistic）』や『包括的宣教（integral mission）』よりもはるかに優れた基盤を持つ聖書的概念であるからだ。」北米では、特に福音派の教会では、ディアコニアについての議論は「ほとんど知られていない」 Benjamin L. Hartley, *Diakonia and Mission: Charting the Ambiguity* (Faculty Publications: College of Christian Studies, 2015), 53-54 も参照：<http://digitalcommons.georgefox.edu/ccs/217>

a) 三位一体の神について

最初のテーマは、三位一体の神の教義への新たな関心、というとらえ方です。多くの神学者は、神の本質的なアイデンティティについて（近年活性化した）古くからの議論の意義を強調しています¹⁰。それを「三位一体の神学の近年のうねり」¹¹と呼ぶ者もいれば、この再発見を「三位一体のルネッサンス」¹²と呼ぶ者もいます。多くの組織神学者は、三位一体の教義を、それによってクリスチャンの信仰が立ちもし倒れもする、非常に重要なものと見なしています¹³。

さらに、多くの国際的宣教大会は、この三位一体の重要性を彼らのミッションに組み込みました¹⁴。宣教学の第一人者である Darrel Guder はそれについて次のように述べています：「三位一体を正しく理解することは、父、子、聖霊なる神の使命を果たす証人の働きに参加することだ。」¹⁵

ディアコニアの概念はヨーロッパや南アフリカで広く用いられていますが、多くのアメリカ人にとってその言葉はなじみがなく、それは通常「総体的ミニストリー（holistic ministry）」と呼ばれています。

¹⁰ Ernst Conradie, *Waar op dees aarde vind mens God? Op soek na 'n aardse spiritualiteit* (Wellington: Lux Verbi.BM, 2006), 227 参照。

¹¹ Scott Frederickson, “The Missional Congregation in Context,” in *The Missional Church in Context: Helping Congregations Develop Contextual Ministry*, ed. Craig Van Gelder (Grand Rapids: Eerdmans, 2007), 46 参照。

¹² Rian Venter, “Trinity and Mission: Challenges to a Reformed Witness in Africa Today,” *Verbum et Ecclesia* 25, no.2 (2004):756 と Almatine Leene, “Triniteit en identiteit. Vrouwen en kerkleiderschap herzien: Implicaties van een missionale ecclesiologie en theologiese antropologie” (DTh diss., Stellenbosch University, 2013), 19-23 の例を参照。

¹³ オランダ人神学者ヘルマン・バーフィンク (1854-1921) はこれに関して著書『改革派教義学』で次のように主張しています：「キリスト教徒全般、また特別啓示全体は神の三位一体性の告白によって決定される。三位一体はキリスト教信仰の核心であり、全ての教義の根原、神学の本体となる。」Herman Bavinck, *Gereformeerde Dogmatiek II* (Kampen: Kok, 1976), 300 からの引用（私訳）。Philip W. Butin, *The Trinity* (Louisville, KY: Geneva Press, 2001), xiii も参照。

¹⁴ 例えば次の文言で始まるエジンバラ 2010 の共同宣言を参照：「三位一体の神を信頼し、緊急性を新たにして、私たちは、罪の赦しの知らせであり、豊かな命の知らせであり、貧しく虐げられた人々の解放を告げ知らせる福音を宣言し、具現化するために召されています。神様が全世界に示されている愛と正義を実践しながら生きて、伝道をするよう、そして証人となるよう、私たちは挑戦を受けているのです。」

¹⁵ Darrel Guder, “Missio Dei: Integrating Theological Formation for Apostolic Vocation,”

（内在的に）三位一体を信じて、教会の使命を実践すべきだと結論を下すこのタイプの解釈は、典型的な改革派神学の考え方とは言えません¹⁶。ですが、神の三位一体の性質について思い巡らすことへと導く改革派の神学思想は広く定着しています。最終的に、神を解明すべき課題としてではなく、知るべきお方として認識することが重要です。そしてそのように、三位一体の概念が私たちの人生におけるクリスチャンの使命と奉仕（ディアコニア）に適用されるのです¹⁷。

b) 「神の宣教（ミシオ・デイ）」について¹⁸

Missiology: An International Review 37, no. 1 (2009):68 参照。

¹⁶ 例えば、ジャン・カルヴァン自身は、神から授かった生命の関係性、アイデンティティ、違い、社会性について、神学的議論を構築しませんでした。Dirkie J. Smit, “The Trinity in the Reformed Tradition,” *Journal of Reformed Theology* 3, no.1 (2009):57-76 は次のように主張しています：カルヴァンが「この議論を躊躇し、避けていたことは、内在的三位一体に関する知識が一見不足していたように見える。…より一般的な方法は、カルヴァンの論理をたどることと、信者が父・子・聖霊に属し、父・子・聖霊によって買い取られ、召され、新しくされるという確信に基づいて、三位一体の普及の実践的な意味を発展させることである。このようにして、改革派神学者たちから、この数十年の間に、影響力のある多くの革新的、刺激的な提案が出されてきた。教会の使命のため、洗礼と主の晩餐のため、キリスト教的な生き方と倫理のために」（pp. 72-73、私訳）。

¹⁷ これに関して Stephen Seamands, *Ministry in the Image of God. The Trinitarian Shape of Christian Service* (Downers Grove, IL: InterVarsity, 2005), 19 は、私たちが（神を頭とする）三位一体の中に受け入れられており、イエスの父に対する使命を続けることによって、聖霊を通して、教会と世界のために仕えるのだと主張しています。

¹⁸ 有名な宣教学者 Lesslie Newbigin は、このテーマに関する彼の考えを説明した *Trinitarian Faith and Today's Mission* (Richmond: John Knox, 1964) という本を書きました。1960年代、特にカール・バルトの影響を受けた三位一体信仰は、エキュメニカルな動きと宣教学の省察に大きな影響を与え、ミシオ・デイの概念に向き合いました。これは後に議論される領域となりましたが、この点でこの特徴的な改革派の三位一体思想の永続的な役割についてはほとんど疑いようがありません。David Bosch は、彼の著書『宣教のパラダイム転換』で、この歴史について詳しくまた細かい洞察で説明しています。「はじめから終わりまでバルト主義者の影響が決定的だった。…宣教は、神の本質から生まれたものと理解されていた。このように、教会論や救済論ではなく、三位一体の背景の中に置かれたのである。…宣教思想については、これが三位一体の教義と結びつくことで重要な革

このテーマは、三位一体の神についての議論と多くの共通点を持っています¹⁹。しかし、それはまた、世界中から非常に幅広い様々な神学的洞察の影響を受けた、それ自身の課題でもあります。本質的に、ミシオ・デイについての議論は、この世への神の関与、言い換えると、神の使命としての宣教に関するものです²⁰。デイヴィッド・ボッシュ（南アフリカの宣教学者）は、20世紀後半の主要人物であり、宣教が神の本質そのものから生まれたという確信を深めました。彼の著書『宣教のパラダイム転換』（原題：Transforming Mission、1991年初版）は、非常に広範囲に及ぶ世界的な影響をもたらし、今日も広く用いられ、取り上げられています²¹。

新を成した。…宣教は主に、そして究極的に、教会が参入できる、三位一体の神、創造主、救い主、Sanctifierの世界のための働きである。宣教は、神の心が原点である。神は愛を送る泉である。このことが宣教の最も深い源である。それより深い部分に達することは不可能である；神が人々を愛しているがゆえに宣教がある。」*Transforming Mission: Paradigm Shifts in Theology of Mission* (No. 16) (New York: Orbis Books, 1991), 389-393.

¹⁹ John G. Flett, "Missio Dei: A Trinitarian Envisioning of a Non-Trinitarian Theme," *Missiology: An International Review* 37, no.1 (2009):5-18 は、ミシオ・デイは三位一体の概念としてよく見られるが、この前提は「不完全な三位一体主義」に依拠しているため、誤っていると主張しています。これは私がここで詳しく述べることができない複雑な神学論争ですが、本質的には、Flettはミシオ・デイ神学の発展が「神の存在とその行いの間の分離」に基づいていると主張しています (p.12)。体系的な神学では、これは内在的で経綸的な三位一体として知られています。この (Flettによれば) 誤った分離は、神の宣教と、その宣教への教会の参入との間の関係を曖昧にしています。

²⁰ Jannie Swart, Scott Hagley, John Ogren and Mark Love, "Toward a Missional Theology of Participation: Ecumenical Reflections on Contributions to Trinity, Mission and Church," *Missiology: International Review* 37, no. 1:76 (2009) 参照。

²¹ ミシオ・デイの概念や「パラダイム」については議論されていることに注意しなければなりません。また、三位一体との関係も複雑です。Kirsteen Kim, "Mission as Evangelization," in Dowsett et al., *Evangelism and Diakonia in Context*, 95, http://www.ocms.ac.uk/regnum/downloads/Evangelism_and_Diakonia_in_Context-wm.pdf は、「ミシオ・デイ神学の多くは、イデオロギー的に構築された」と強く批判されてきた社会的三位一体の一形態である」と主張します。これは、このプレゼンテーションの域を超える、しかし徹底的に考慮する必要がある複雑な体系的な神学論争です。

ミシオ・デイは総体的であり、そのためディアコニアはケリュグマ（宣教内容）とレイトウルギア（礼拝）と密接に結びつき、究極的にコイノニア（コミュニティ）を育みます²²。これについては、Ham Stanardの次の主張と結びつけるだけで十分でしょう。「ディアコニアはそれ自体で完結するものではなく、どんな人でも受け入れる公正なコミュニティ、家（オイコス）、すべての人のために用意されている豊かな人生を楽しむためのすべての被造物を含む家庭、を建て上げるために他と同様に神が用いられる道具です。」²³

次に、これら二つの議論が、どのようにディアコニアの定義と実践に影響するかを見てみましょう。

c) 現代の南アフリカオランダ改革派教会のディアコニアについて

2013年、南アフリカオランダ改革派教会（以下DRC）の教会規定に、次のような新条項1が追加され改正されました：「オランダ改革派教会は、この世での神の宣教に加わることが求められている。教会は、神の栄光を表すために仕え、キリストの救いと和解を宣言するために、聖霊によって立て上げられた。」²⁴

²² 教会の次の側面の間に密接な関係があります：ケリュグマ、コイノニア、ディアコニア、レイトウルギア。宣教とディアコニアの関係についての詳細は、Hartley, "Diakonia and Mission," 53 および Hannes Knoetze, "Missionary Diaconate: Hope for Migrated People," *Missionalia* 41, no.1 (2013): 40-41, 46-47 を参照。Flett, "Missio Dei," 5-18 も参照。

²³ Carlos E. Ham Stanard, *Empowering Diakonia: A Model for Service and Transformation in the Ecumenical Movement and Local Congregations* (VU of Amsterdam, 2015), 8, http://dare.uvu.vu.nl/bitstream/handle/1871/53516/complete_dissertation.pdf

²⁴ Algemene Sinode van die NG Kerk in Suid-Afrika (南アフリカオランダ改革派教会総大会), *Handelinge van die vyftiende Vergadering van die Algemene Sinode van die Nederduitse Gereformeerde Kerk* (Pretoria: Algemene Sinode, 2013), 8, <http://www.ngkerkas.co.za/wp-content/uploads/2013/09/NOTULEALGEMENE-SINODE-2013.pdf>

DRC は、この教会規定の改正によって、そのアイデンティティが、宣教的教会論、つまり教会であることの宣教的理解、に根ざしていることを明らかにしました。この改正は、何年もの神学的議論の結果でした。この新しい枠組みの中で、執事活動の原点は三位一体に遡ります。三位一体の神の主な三つの特徴—愛、コミュニティ、正義—は、教会のディアコニアの基礎と見なされています²⁵。したがって、執事活動の実践には、福祉事業以上のものが含まれています。それは三位一体の神特有の完全な愛のコミュニティに基づく関係を意味します。

上記のようにボッシュの影響を受けてミシオ・デイに改めて目が開かれたことで、DRC は、今まで教会中心・自民族中心に指導してきたことがどれほど間違っていたかを知るに至りました。この新しい理解によって DRC は、神の御国の進展のために、謙遜な宣教的・執事的働きを通じて世界に目を向けるようになりました。しかし、今日の DRC は、教会の働きをさまざまな形で妨げてくる社会、キリスト者が非キリスト者（またはかつてキリスト者だった者）に囲まれて生きるポストキリスト教社会の中で機能しなければなりません。この巨大な変化は、私たちに新しくクリエイティブな考え方とクリスチャンとしてのあり方を見出し、教会の教会論と宣教学を再検討することを求めています。

i) 教会の宣教と三位一体の神

教会と教会の宣教は、神ご自身の存在そのものからくると理解されています。宣教とは、人間の達成目標のようなものではなく、神からの贈り物です。聖書は、神が送り出す神（言わば宣教的な神）であることを教えています。だからミシオ・デイが盛んに言われるのです。神のあり方そのものが、送り出す（宣教的）プロセスです。父なる神は世界（被造物）をとても愛し、新しい命と希望を与

²⁵ Nicholas Wolterstorff, "Is There Justice in the Trinity?", in *God's Life in Trinity*, eds. Miroslav Volf and Michael Welker (Minneapolis, MN: Fortress, 2006), 177-187 はこれを非常に的確に説明しています：「義は三位一体の中の愛の構成要素である」（2006:187）。このように義をディアコニアの中心的側面と見なすことができます。それどころか、義は執事的な関わり方（コイノニア）と実践の統合の一部でなければなりません。

えるために、独り子を送ってくださいました。そして、御子イエス・キリストは、教会に寄り添い、教会に力を与えるために聖霊を送られました。そして、父、御子、聖霊は教会を世に送り出されました（ミシオ・エクレシエ、教会の派遣/宣教）。このように、送り出すことだけが神のなさることではありませんが、神は本質的に送り出される神、すなわち宣教的な神なのです。このことから、私たちが「神は愛である」と言うのと同じように、「神は宣教的な神である」と言うこともできます。

上記のすべては、三位一体の神が、自分に仕え自分の必要を満たすだけのコミュニティとは正反対であることを意味します。ですから、キリスト者の使命は御国を告げ知らせるものであるべきです。そこでは、御子の犠牲的な愛を通して全ての人と命が共有され、そこから聖霊を通して周りのすべての人々に明らかにされていきます。

しかし、教会は三位一体の神だけでなく、キリストを通して、この地上でのキリストの働きにも関与します。私たちは、教会が神のみに属していると信じており、神のみと契約関係にあります。教会は、神の民、キリストの体、聖霊の宮です。教会が何であり、何をするか（アイデンティティと使命）は、この関係に基づいています。教会のありとあらゆることが生きておられる神との関係によって定義されるべきだということは、「教会であること」の最初で、そして最も重要な基本原則です。

ii) キリストの受肉

受肉は、キリストが人となられたことです。イエス・キリストの受肉は、神の宣教と、この世と交流するために神が選ばれた非常にユニークな方法を物語っています。実際に、キリストが人間（肉）となられたことは、教会が受肉的なライフスタイルを理解し、営む手助けをします。受肉的であるということは、その人が誰であろうとどこにしようと、その人と共にいるということです。このことを理解することで、背景と文化を真剣にとらえなければなりません。それは決して教会を支配することはありません。教会はコミュニティの一部で